

# W. H. Hudson の小説における Yoletta の位置

Yoletta's Position in the Novels of W. H. Hudson

佐藤 幸正  
Yukimasa Satoh

## 序

W. H. Hudson の小説，特に処女作の *The Purple Land*(1885)，第二作の *A Crystal Age* (1887)，及び代表作 *The Green Mansions* (1904) の三作を中心に，それぞれに登場する女性を比較検討してみると，そこには諸点において共通した特徴が見られる。これを念頭に置き，稿者はかつて *Green Mansions* の女主人公 Rima と処女作に登場する二女性，即ち Margarita 及び Transita とを比較し，その結果 Rima の原型を彼女たちのなかに探し求めたことがあった。<sup>1</sup> その際，第二作の Yoletta という女性とこれら三人との関係については残念なことに十分意を尽すことができなかったのである。しかし，処女作の二人の女性から Rima 成立までの過程を推察する時，この間の Yoletta の果す過渡的な役割を無視するわけにいかないのである。Rima を完成された女性像，あるいは理想像とみなす時，処女作の二女性がその原型としての役割を果たしているのは確かであるが，その原型が一足飛びに Rima 成立に繋がったと考えるのは飛躍すぎるのである。恐らくこの間に，その成長・発展期に相当する女性が存在すると推測する方が順当であろう。第二作の Yoletta は正にこの時期に相当する登場人物なのであり，Rima という理想像成立までの過渡的な存在とみなされるのである。以下，Yoletta が処女作の二女性からどのようにその原型を受け継ぎ，どのようにこれを Rima に継承してゆくのか述べてみたい。

## I. Yoletta 点描

第二作の *A Crystal Age* は処女作同様，いろいろな意味において以後の作品の特徴を包含している。例えば，1880年代のロンドンのような文明社会から遠く隔たった荒地に舞台を設置し，自然と共に生き，それを享受する生活を描いたこの作品は *Green Mansions* や *Dead Man's Plack* の舞台背景へと継承されている。処女作ではパンパスだったもの

がこの作品では荒地となり、*Green Mansions* に至って森林という具合に、その舞台背景は変化を見せてはいるが、何れも大自然に舞台を配置している点で、同一基盤に立脚した作品となっている。また、女性に関して言えば、Yoletta という美しい女性の不可解な性格描写、超人的な行動、美しい声等には Rima の特徴を暗示するものがあり、これらは来るべき理想像成立への重要な要素をなしていると考えられる。

Yoletta は主人公の Smith 青年に当初14, 5歳と推定されるが、この年齢は Margarita の14歳や Rima の17歳と比較すれば若干の相違はあるが、何れも15歳前後の美少女という点では共通する。もっとも、長寿国に住む Yoletta の場合は後で31歳であることがわかるが、彼女の容姿や言動、あるいは精神年齢から判断する限り、終始14, 5歳に相応しい少女として表現され、Smith の恋人役となっている。作者がなぜ彼女にこのように不相応な年齢を配したのか疑問に思うのであるが、それは第二作は彼の理想郷を描いた作品であり、そこに登場する人々は全て長寿に恵まれているためである。例えば、彼女の父親は、198歳という高齢にもかかわらず、70歳位にしか見えないといった具合なのである。彼女が年齢よりもはるかに若く描かれ14, 5歳の美少女に相応しい言動に終始するのはこのためである。

彼女はウェーブのかかったふさふさした髪を肩まで垂れているのであるが、このような長い髪的女性は作者の好みなのか、Margarita や Rima もその例外ではない。次に彼女の髪色については “in colour it was golden black—that is, black in shade, but when touched with sunlight every hair became a thread of shining red-gold; and in some lights it looked like raven-black hair powdered with gold-dust.”<sup>2</sup> と述べられているように、光線の濃淡により、薄暗い所では “black”, 明るい所では “red-gold” という具合にその色も変化して見えることがわかる。この髪色の変化する描写は第二作に限られたことではなく、Rima の場合にも同様のことが言えるのである。彼女の場合には、光線の濃淡のみならず、対象を見る者の遠近に応じて、Yoletta の場合よりも一層複雑な色彩を帯び、一言では説明できないほど変化に富んでいる。処女作ではどうかといえば、Margarita の髪色については “her golden-brown hair hung in two heavy braids behind, almost to her knees”<sup>3</sup> とあり、Transita の場合も “her golden hair blowing in the wind”<sup>4</sup> とあって、単純な色彩表現に留まっている。従って髪色の複雑な色彩に関しては Yoletta が直接 Rima の遠因をなしていると推測できるのである。

次に彼女の目の色に関して述べれば、髪色同様、遠近に応じて変化して見える。即ち、遠くから見ると “black” であり、近くから見ると “a wonderfully pure, tender sea-green” とある。<sup>5</sup> この色は彼女のみならず彼女の家族全員に当て嵌るのであるが、彼女の立場か

ら見れば、文明社会からこの国にやって来た Smith 青年の “blue-grey” の目、しかも色の変化しない目が不思議に見えるのである。また、彼等の視力については “They appeared to be gifted with an owlish vision, able to see with very little light.”<sup>6</sup> と記され、極く微かな明りで、読書や手仕事が可能なのであるが、これは目の色の変化と同様第二作で始めて使われた手法であって、一層発展した形で Rima に継承されている。即ち Rima の視力について触れるならば、彼女は夜でも自由に行動でき、遠くの物を識別することができ、あるいはハミング・バード (hummingbird) が空中に静止する瞬時に、その喉の小羽毛を数えることができる超視力を有しているからである。

理想郷では文明人たる Smith 青年の持前のきれいな声も濁声だと非難される。またロンドンの一流店で仕立てた服も彼等の美しく着飾った粋な服装に比べれば、野暮でみすばらしい服に成り下がってしまうのである。服装のことはさておき彼等の声について言えば、美妙で身に滲みるような声をしており、いかなる人々のものとも異なる。作者が登場人物に特異な声質を与えるのはこの作品に限られたことではなく、既に処女作で Margarita の声を “the wild melody of the sandpiper’s notes”<sup>7</sup> と磯鷗に譬え、鳥の鳴き声を人間の声に譬える例の技巧に気付くのである。第二作では長老の説教時の声や Yoletta の笑い声、あるいは Yoletta の歌声等にその特異性が窺え、それは処女作以上に複雑化され、強調されて、より広範に利用されている。Yoletta に具体例を挙げれば、彼女が辺りの静寂を打ち破り、突然笑い出した時の様子は次のように記されている。

Presently, in the profound silence which ensued, a low, silvery gurgling became audible, as of some merry mountain burn—a weet, warbling sound, swelling louder by degrees until it ended in a long ringing peal of laughter.<sup>8</sup>

山の小川が陽気にさざめく音に譬えられた彼女の笑い声は、Margarita の磯鷗の譬えに比べれば、その表現技巧も一層複雑さを増し、不思議な印象効果を与えることに気付くであろう。この声の美しさは Rima に至ると、神秘的で霊妙な旋律まで高められ、それを傾聴する者はある特殊な鳥の調べと錯覚するほど発展する。このことは Margarita や Yoletta の中に、既に来るべき Rima の霊妙な音楽性が用意されていたことを物語るのである。

Yoletta についてもう一つ注目すべきことは、その急変する顔の表情である。それまで何気なく話し続けている時や、それまで生々していた表情が突然曇り、伏目がちになる場合がよくある。次にその一例を示そう。

But for a few moments after speaking, she continued regarding me with that bright, spiritual smile on her lips; then it faded, and her face clouded and her glance fell. I did not ask her to tell me, nor did I ask myself, the reason of that change; and afterwards how often I noticed that same change in her....<sup>9</sup>

このような表情の急変は Rima の場合にもしばしば見受けられるが、処女作に逸早く認められる。それは Demetria という女性においてであり、彼女が家に居る時の無口で、心配事を秘めたような表情が、信頼できる人々と一緒になると、突然晴やかな表情に変化する例がそうである。丁度それは、Rima が Nuflo 老人と森の小屋に居る時は控え目でその表情も精彩に欠けるが、一旦森に出るとまるで空を羽搏く鳥のように振舞う時の表情に似ている。H. E. Bates は30代の時に Hudson の殆んどの作品を愛読し、その影響を大いに受けたと自称しているのであるが、<sup>10</sup> 彼の小説にもこれに類似した描写が見られる。例えば彼はある女主人公の目の表情が時々生気のないものに変化する様を描き、これを籠の鳥に譬えて表現した一節がある。<sup>11</sup> これなどは Hudson の例に習ったか否か別にしても、興味のある一致と言えよう。

Hudson 小説における女性点描という観点から言えば、女主人公の持つ機敏な動作や素早い身のこなしについても避けて通れない問題がある。Rima の森林における例の超人的な行動は、その萌芽を求めるならば、処女作の Margarita について記した “swift and graceful in her motions”<sup>12</sup> という語句に存在するように思える。この単純な表現は Yoletta を経過し、Rima に至ると、あの不思議な驚くべき行動力へと発展するのである。Yoletta の場合は両者の中間に位置し、処女作に見られる上記の単純な語句を発展・展開させたところにその意義があると言える。例えば彼女と Smith が付近の山へ登る時の彼女の迅速な足取り、あるいは道中川を渡る時の、岩から岩へ飛びはねる軽やかな身のこなし等は、超人的ななかにも優雅さがあり、Rima を彷彿させるのである。以上の諸例から、処女作の女性たちが来るべき Rima の萌芽となり、その誕生を予告しているのは間違いないと思われるが、その萌芽が直ちに Rima を創造したと判断するのは Yoletta の役割を看過するものと言わねばならない。また、処女作の女性たちが Rima の全ての萌芽を包含していると判断するのも早計であろう。なぜならば処女作に見られなかった萌芽、例えば前述の変化に富む目の色や超視力などは、第二作において始めて描出されるのであり、これが Rima へ継承されているからである。

## II. Yoletta に見られる愛の認識

*A Crystal Age* は作者の現状に対する不満から生まれた、来るべき理想社会を追求した小説であるが、彼の理想とする社会ということから言えば、既に処女作にその萌芽が発見されるのである。ただ両者の異なる点は、処女作では主人公がアルゼンチンから舞台となっているウルグワイのパンパスにやって来て、牧畜業を営む素朴な人々の生活に触れた時、偶然にもそこに理想郷を見出したのに対し、第二作では作者が予め、かくあるべき未来社会の姿を意図的に想定し、当初からそのような架空国を物語っている点である。従って、前者では南米のパンパスで生活する人々の描写が、恰も絵巻物でも見ているように生々としたリアルな表現となっているのに対して、後者では作者が理想とする観念的な社会を描いているため、全体的にみて、その表現には現実性に欠ける誇張があったり、あるいは曖昧さが見られるのは否めない。とは言え、作者が序文で言うように、未来物語は現体制に対する不満から生まれるのであれば、<sup>13</sup> この二作を通じて、彼が1880年代当時の現状に対してどのような態度を示していたかを物語ってくれるのである。

この夢物語に登場する Yoletta という女性は愛に対する感情において一風変わった態度を示し、この点 Rima の態度に類似している。一風変わったというのは彼女は所謂俗界の男女間の恋愛感情を知らないということである。従ってロンドンから理想郷に入った Smith はやがて彼女に恋愛感情を抱くのであるが、二人は決して結びつくことはなかったのである。彼女には、あるいはこの理想郷にはただ「一種の愛」(one kind love)しか存在しないからである。換言すればそれは姉妹愛(sisterly love)のことであり、彼の求める肉と魂を伴った愛とは異なる。彼女がこのような愛の観念を抱く背景には、理想郷の中心舞台となっている、父母を長としたある大家族の習慣と関連がある。と言うのは、この大家族にあっては父母以外の者にはただ一つの愛、即ち兄弟・姉妹愛しか存在せず、特殊な場合を除いて結婚制度がないからである。従って、二人の愛の認識が異なるが故に、その恋愛関係は平行線を辿り、最後まで交わることがない物語となっている。

このように現実界では想像できないような、言わば性の抑圧とも思われるストイカルな愛の様式を、作者はなぜ構想したのであろうか。これを理解する手段として彼が Edward Garnett に宛てた手紙の中に、D. H. Lawrence 評が載っているのであるが、この文中にその鍵を解く手懸りが暗示されているように思える。

Lawrence is all right no doubt, only I've had so much to do with flesh that his insistence on it — its warmth or hotness, its colour, the curves of it, and the

kisses pressed on it with hot, wet lips — goes against me. By and by when he grows out of this stage, which often comes to a young man who has repressed all his sexual instincts from religious motives, until he gets himself suddenly free of them, he may do some really good work.<sup>14</sup>

これは1913年6月10日付の手紙であるが、恐らく親しかった批評家の Edward Garnett に Lawrence 評を求められて、彼が書き宛てたものであろう。この手紙文は Lawrence の初期のある作品を批評したものであるが、彼の将来に期待しながらも、その執拗な生々しい肉体描写には賛同できない気持ちを述べたことに違いはない。同じく1913年11月2日付の Garnett 宛の手紙で、*Sons and Lovers* に触れた時も、非常に立派な作品だと言いながら、そのエロチックな肉体描写に関しては同趣旨の批評をしている。<sup>15</sup> これらの手紙文から推察されるように、作者は Lawrence のようにその生命の哲学に基づいて、肉体を赤裸裸に公表しなければならない主義も主張も持っていなかったと言える。このことは彼の作品を通読すれば理解されるのであるが、都会文学よりも自然文学に、性の解放よりも鳥類あるいは自然の目に見えぬ霊と交わることに興味を示す彼にしてみれば、Lawrence の肉感溢る描写の真意は理解できなかったものと思われる。二人とも自然の深い愛好者であり、地方の自然に舞台を置きながら、このような相違が生じるのはその哲学や思想が異なっていたためであろう。Hudson の興味の対象は肉体の賛美や、肉体の合致にあったのではなく、むしろ肉と土の合致、即ち人間と自然の一体にあったのである。このように二人は興味の対象も哲学も異なっており、その上 Hudson 文学そのものがイギリス18世紀以降のロマン主義の流れを汲むものであり、男女間の恋愛感情においてもヴィクトリア朝の道徳を逸脱しないものである以上、彼には Lawrence の肉体賛美の思想は受け入れがたいものであったことは容易に想像されるのである。

作者が Yoleta にこのような愛の認識を付与したもう一つの根本的な理由は、時代に対する彼の反抗精神にある。従って、それは当時の時代風潮と密接な関係があるのである。Robert Hamilton は、当時、性本能を過大に重要視する傾向があったことを指摘し、次のように述べている。

The modern tendency to give too much importance to the sexual instinct — a tendency which, in itself, increases it — has been fostered, not only by our artificial industrial environment, but by psychoanalysis, and by the modern novel as typified in the work of Lawrence.<sup>16</sup>

この引用文によって、当時性本能を過大視する傾向が産業界のみならず精神分析学や小説によって助長されていたことが理解されるのである。彼は更に言葉が続けて、“It may be that Hudson overrated the force of the sexual instinct, and this probably led him to exaggerate the necessity for its transcendence....”<sup>17</sup> と述べ、性本能の猛威を過大評価した作者はこれを超越する必要があったのだらうと推測する。このような時代環境に置かれた彼が男女間の愛情を表現するのに、時代の潮流に同調するよりはむしろ反対の立場に立ち、多少誇張しながら精神的愛を強調していったことは十分考えられることである。というのも、愛の問題に限らず、この作品には当時の風潮に逆行する場面がしばしば登場し、機械化された社会や物質万能を揶揄しているからである。例えば、大量生産や効率を求めて、機械が肉体労働にとって代る時代だったにもかかわらず、Smith が樵や野良仕事に働く喜びを感じる場面などがそうである。我々はそこに肉体労働の喜びや尊さを再発見し、究極的には人間存在の本質的意義を見い出すのである。これに共通した主張は William Morris の *News from Nowhere* にも窺われるのであるが、更には現代アメリカのテレビドラマ作家の第一人者、Paddy Chayefsky の *Printer's Measure* という一時間物にも見られ、古くて新しいテーマが今も繰り返えされているのに興味を覚える。このテレビ・ドラマの主人公 Mr. Healy はアメリカは1939年当時の印刷屋に勤務する老植字工である。彼は主人が時勢に即応して新式の印刷機を導入したことに断固反対し続け、拳句のはてにこれを破壊し、店を去らねばならない原因を自ら作ってしまう。この原因の背後にあるものを考えるならば、主人公が昔ながらの簡易印刷機による手仕事に愛着し、自らの技術に誇りを持ち、労働に喜びを抱いていたからに他ならない。機械が必ずしも人間の幸福に繋がるものではなく、むしろ肉体労働に人間存在の本質を見い出す点では三者に共通性が窺えるのである。

Hudson の第二作には以上の他にも、貨幣が無価値であったり、知識の偏重を批難したり、草も無い住宅が蜂の巣のように立ち並ぶ都会を皮肉を込めて揶揄する場面が登場し、当時の社会に対する不満や弊害が描かれているのである。このように見てくると、作者が Yioletta にあのような愛の様式を与えたのは、もともと彼には Lawrence 的な性本能を殊更に主張しなければならない理由がなかったこと、むしろ時代風潮の齎す弊害に反撥する精神の持主であることから、行き過ぎた性本能を超越し、意図的に精神的な愛を強調したものであると思われる。作者が Garnett に宛てた次の手紙文が何よりもこの間の事情を説明していると思われるので、次にこれを引用しよう。

The sexual passion is the central thought in the “Crystal Age”: the idea that

there is no millennium, no rest, no perpetual peace till that fury has burnt itself out, and I gave unlimited time for the change.<sup>18</sup>

この手紙文からわかる通り、作者はこの小説のなかで、人間の性欲という問題を中心思想としているけれども、その行き過ぎを肯定するものではなくて、その猛威が消滅しなければ恒久的の平和があり得ないことを夢物語に託して訴えたのである。彼が感動的な純化された男女間の愛を描く理由は結局はこのような思想に基づいているためであろう。

### III. 母と娘の構図

三作に共通して言えるのは母と一人娘の登場するパターン化であり、かつ作品相互間に類似した有機的な関連性が見られることである。母と娘が性格や特徴において類似性を持つこと自体、何ら不思議なことではないが、上記三作はこの親子関係がそれぞれの作品で密接に作用し合っており、一作毎に順次発展していったのではないかと思われるのである。まず、処女作の親子関係について述べるならば、母 Transita もその子 Margarita も共に美貌の持主であり、ウルグウィのパンパスという大自然の中で生きる喜びを味わっている点は、Yoletta や Rima とその母についても同様のことが言えるのである。処女作は全29章から成り、そのうち二人について述べられているのは2、3章程度にすぎないが、彼女たちの中に以後の作品に登場する女性の原型が潜んでいる点で重要なのである。構成面から言えば、淫らな夫に捨てられた Transita はその死際に、当時まだ幼かった Margarita を昔の恋人に託す場面があるが、それは丁度 Rima の母が今際はその子を Nuflo という男に託す場面と同構成になっている。しかも Transita が自分の生育した人里離れた海辺でその子を育ててくれるよう依頼するのは、Rima の母が山の空気の良い場所へその子を依頼したのに似て、何れも人気のない淋しい自然環境を育児場を選んでいいる。また、双方の母親に共通しているのは神聖な女性である点で、Transita の場合には “some being from I know not what far-off celestial region who had strayed to earth”<sup>19</sup> とあり、まるで天上界から迷い込んできた天使のごとき女性である。他方 Rima の母も Nuflo たちに発見された時 “her head was surrounded by an aureole like that of a saint in a picture”<sup>20</sup> と表現され、素晴らしく美しい聖なる女性として描写されているのである。Rima についても、あるいは Margarita についても同様のことが言えるのであるが、この女性神聖視は作者の女性観を示す一特徴と言えるであろう。次に第二作の親子関係について述べると、

Yoletta もやはり一人娘であり、“the face of one of the immortals”<sup>21</sup> とか “her crystal nature”<sup>22</sup> などの表現に見られるように、やはり神聖視され、神々しい顔つきをした水晶の如く澄んだ性格の持主に描かれている。彼女の母 Chastel もまた神聖な女性として描かれ、娘同様自然を愛する点では他の二作の親子と共通性を持つのである。作者がこの娘に肉欲を知らない純粋な愛を与えた理由は、性欲の猛威が消滅しなければ恒久的の平和が来ないとする思想に基づくものであったが、もう一つは今述べた作者の女性神聖視にも起因していると思われる。Rima に見られる愛の様式も、彼女の場合に類似して純粋な領域を出ないのは、このような理由によるものと思われる。

Yoletta と Smith が互に愛を告白し、愛を確認し合う場として山頂が選ばれているのは奇妙な感じを与えるのであるが、Rima と Abel の場合にもこれに類似した場面が設定されており、同構成になっているのは不思議なことである。アルゼンチンの大草原で30代半ばまで過した作者にとって、山や小高い丘は珍しかったのであろうか。彼は処女作から既に丘を登場させており、それに何らかの役割を与えていることから推測すれば、山や丘は来るべき愛の舞台となり得ることを暗示しているように思える。処女作の場合、主人公の Richard が将軍 Marcos に案内され、国内のある丘に登るのであるが、その頂上で辺りの牧畜場や山、川等の名前を説明してもらう場面は、丁度 Abel が山頂で Rima に下界の説明をする、例の場面を思わせるものがある。また、処女作のその丘は将軍が主人公に、Transita 親子の秘話を打ち明ける告白の場にもなっており、他の二作に見られる主人公同志の愛の告白場面の伏線になっているように思われる。第二作に例を挙げるならば、山頂で Smith がその愛を Yoletta に告げ、彼女がそれに答える問答場面が次の如く展開されている。

“Is there any other person dearer to your heart than I am?”

“I love every one in the house, some more than others. Those that are closely related to me I love most.”

“Oh, please say no more! You love your people with one kind of love, but me with a different love--is it not so?”

“There is only one kind of love,” said she.<sup>23</sup>

これで見ると、彼女の抱く愛はただ一つの愛、即ち肉親や兄弟姉妹を愛する意味ではない。彼女はこれで彼をも十分愛せると考えているわけだが、彼の方はこのような精神的愛だけでは満足できず、彼女の問いに次の如く答えている。

“What is it that you wish?” she questioned.

“That you should be mine—mine alone, wholly mine—and give yourself to me, body and soul.”<sup>24</sup>

彼の愛はこのように肉も魂も伴った世俗的なものであるが、それは理想郷には存在しないのである。他方、Rima の抱く愛も純粋な愛で、世俗的な愛を知らず、Abel の説明によりこれを次第に理解し、遂にこれを受け入れようとする例の態度は、Yoletta に既にその先例を窺えるのである。作者は Rima の場合も Yoletta 同様、神聖な女性として描き、それに相応しい愛のあり方を考案して、意図的に時代風潮に逆行する愛の様式を与えたものと思われる。処女作では將軍の告白場だったものが、第二作では男女間の愛の告白場へと変化し、これが *Green Mansions* に継承され、例の Abel と Rima の愛の証の場面を形成するという具合に、山や丘は各作品において重要な役割を担っていると言える。

ところで Yoletta とその母との関係については、他の二作の場合と好対照をなしている例も多く見られる。処女作での Transita はその子がまだ赤ん坊の時に死亡したため、Margarita は恐らく母の面影すら記憶に留めていない筈である。従って、彼女はその美貌にもかかわらず、百姓の娘であると信じ、何代も続いたスペイン貴族の末裔であることも知らない。一方、Rima の母もその子がまだ幼い頃に亡くなっているが、Rima の場合は幽かに母の面影だけは記憶に留めている。Yoletta の場合には母は病気をしているが、存命中であり、父親の198歳という年齢から推定してもかなりの高齢に達している筈である。また、家族の長としての父母は権威があり、掟を破る者を裁くのは父であり、必要に応じて恩赦を与えるのは母となっている。その他、理想郷の慣習として子供を生む特権は父母にのみ与えられているなど、他の二作に全く関連しない現象も見られるのである。また、各作品における母親の占める重要性という観点から言えば、処女作及び第二作は娘と大体同程度、もしくはある意味ではそれ以上の役割を与えられているのに対し、*Green Mansions* では逆に母の占める役割がかなり後退し、Rima の占める比重が大幅に増している。このことは Rima という登場人物が、これらの女性の特質を集約して、次第に独自の人格を形成してゆき、母親の役割を制限していったものと考えられる。試みに、父親の果す役割について言えば、処女作及び *Green Mansions* では殆んど皆無に等しいのに反し、第二作ではかなり重要な位置を占めているところに異色がある。

#### IV. 第二作における母像

第二作は1885年発表の作品であることから、その当時のロンドン社会を諷刺したものに違いないけれども、この中にはいろいろ風変わりな事柄が見受けられる。文化の中心地からやって来たSmith 青年もこの国においては、その服装のみすぼらしさ、その声質の悪さ、あるいは品位のない話題等を指摘され、みなに白眼視されるといった具合である。これを裏返せば、この国ではみな立派な衣裳を纏い、声が美しく、話題も都会人と異なるということになるであろう。例えば、次の引用文は父親と Yoletta との間に交される会話であるが、自然と日常生活が密着していなければこのような美しい表現は生まれてこないであろう。

“Ah, my daughter,” he said with a smile, “shall I guess what has inspired you to-day? You have been listening to the passage birds. I also heard them this morning passing in flocks. And you have been following them in thought far away into those sun-bright lands where winter never comes.”

“No, father,” she returned, “I have only been a little way from home in thought—only to that spot where the grass has not yet grown to hide the ashes and loose mould.”<sup>25</sup>

この会話には鳥類や植物の観察に一生を捧げ、自然と人間の、鳥類と人間の調和を一貫して説き続けてきた作者の態度が、自然美溢れる言葉の結晶となって、芸術へと昇華していることに気付くのである。

風変わりといえば人々は貨幣というものを知らず、これに価値を見い出そうとしないことで、これは当時の貨幣社会を揶揄したものであり、Thomas More や William Morris の主張と相通じるものがある。金貨以上に彼等の尊ぶものは畑仕事や椎、あるいは木彫であり、女性たちでいえば刺繍、編物、裁縫等であって、このことは機械中心の文明社会を批判したものと受け取れるのである。都市についても同様の批判があり、Smith から都市とは何十万もの家屋が密集し、草の一葉も見ずに居心地よろしく暮せる所だと説明された Yoletta の父が、彼を気違い扱いするのは、自然との交わりを常とする生活からは想像できないことだからである。Yoletta もこの説明を聞いて憐れみの表情を浮かべ、彼に辛辣な皮肉を浴びせているのは、作者が意図的に都市対自然という対立構想を念頭に置き、前者を非難しているためである。この国には人間に都合の良いことばかり存在するのではな

く、不注意のため病気をしたり、あるいは貴重品を破損した場合、その者は裁判にかけられ、処罰の対象となる。病気が罪になるというのは Roberts の指摘通り、<sup>26</sup> Butler の *Erewhone* にその先例を見るが、Smith の場合に例をとれば、彼は働きすぎて過労のため病気になるのであるが、不注意のためだと言われ罪になる。つまり、労働には適度の休息が必要であり、快楽を伴うものでなければならぬとする作者の真意をそこに見て取れるのである。

理想郷の実態を示すのに作者はある大家族の日常生活を中心に描写しているのであるが、その生活の一端は次の例に窺えるであろう。

At night we sleep ; in the morning we bathe; we eat when we are hungry, converse when we feel inclined, and on most days labour a certain number of hours. But more than these things, which have a certain amount of pleasure in them, are the precious moments when nature reveals herself to us in all her beauty. We give ourselves wholly to her then, and refreshes us ; the splendour fades, but the wealth it brings to the soul remains to gladden us.<sup>27</sup>

これは大家族の長老たる父が Smith に語っている場面であるが、現代のように時間に拘束された社会から見ると、実に気楽で長閑かな情景が映じてくる。この場面でも作者は、自然と共に生きそれを享受する生活に力点を置いた彼の理想を表明しているのである。

彼等は22人の大家族から成り、古びた大きな館に住んでおり、各人が作業を分担し合って、一種の協同体をなしている。彼等を統率するのは“heads of the house”即ち父と母であり、特別な権利を有し、家族のみならず愛され敬われる存在である。母の場合について言えば、“her wishes are sacred, and what she wills is right”<sup>28</sup>と記されているように、彼女は父の判決で有罪になった者に対しても、これを許すことができるという、言わば家族の掟に優先する権利を持っている。彼女は大邸宅の中に彼女自身の部屋“Mother’s Room”を持ち、家族全員の日常行動を把握している。また、子供を生むのも父母のみに与えられた特権で家族の他の者にはこの権利はない。従って、二人には家の威厳と栄光とが集中されてくるわけであるが、彼等がその権力を振り翳し、濫用するようなことはない。彼等が権力を行使するのは、だれかが家族の掟やエチケットを破った時に限られ、有罪の場合でもパンと水が与えられて、何日間か監禁される程度のものである。母にはこの他にも家族とは異なる精神と肉体が与えられている。先ず精神面から言えば、彼女には他

の者にはない不思議な能力が与えられている。それは高度に浄化された性格からくる鋭い洞察力や思い遣りのことで、Smith の苦悩する心もこの能力によって読みとられてしまうのである。母 Chastel の持つこの精神機能は作者の *Far Away and Long Ago* という作品を読むとわかることであるが、彼の母の面影を宿しているように思える。というのは作者が十代の時病気で苦悩する心を読みとり、だれよりも理解し、励ましてくれたのは他ならぬ彼の母親だったからである。<sup>29</sup> 母の持つもう一つの精神機能は、他の家族の者にも等しく窺われるのであるが、自然観照時に発揮される特殊な能力であろう。彼女の語るところによれば、彼等には Smith に無い能力、即ち可視界の美と調和を靈魂化する能力が備えられている。このため彼等は自然を精神化し、これを芸術に表現できるのである。従って、彼等の芸術品は対象たる自然と彼等の特殊な精神機能とによって創作されるが故に、彼等は日常自然を仲間を愛するが如く愛し、これに感謝し、目に見えぬ霊との交わりを重要視するのである。母のこの言葉には作者の自然観のみならず、彼の根本的な創作態度が含まれている。自然を人間を愛するごとく愛するということや、これと親しく語り合うということは、作者が自然を単なる物理的現象と見なしているのではなく、知性や感情を備えた人間の同胞と見なしていることを証明する。鳥類に対しても彼はこれを “feathered people” とか “feathered fellow-creatures” 等と呼び、やはり人格性を与え、人間と同格視していることがわかる。母なる人の自然観照態度はこのように作者の自然観の反映であるが、無論 Yoletta も母の態度を受け継ぎ、自然や鳥類を愛でる、心の優しい女性として描かれている。後年作者が Rima を創造し、彼女にあらゆる自然美を、また鳥のイメージを与え、特異な女性像を完成したのは、彼の自然や鳥類に対する同胞意識によるところ大であったと言えよう。

母 Chastel が家族の他の者と異なる点は、人の心を読みとる不思議な能力を持っているだけではなく、その肉体にもある。彼女は「母の部屋」と呼ばれる特別な部屋に住み、絶えず家族に取り囲まれて、何不自由なく暮しているように見えるが、不治の病に苦しんでいる状態にある。それは彼女の科白 “I must remain day and night here with the shadow of death”<sup>30</sup> から推測されるのであるが、彼女は絶えず死の影に付き纏われているのである。というのは、この家族にあっては父と母のみが子供を生む権利を有しているわけだが、母は分娩時に苦痛と危険を伴い、そのため石女となり、悲しみを背負って生きるように運命づけられているためである。従って母なる人は栄光と悲哀を味わいながら生きてゆかねばならないのだが、子孫の繁栄という問題を考えれば、もはや現在の二人にはその能力がない。従って彼女は、Smith に家族の秘密を学ばせ、彼等と同等の精神領域まで高められることを望み、一人娘の Yoletta と連れ添い新たな父母となり、彼等の後継者とな

ることを密かに期待しているように見える。しかし、Smith は家族の秘密を学ぶべく、書庫にあった本を手にしそれを読んだ時、彼女と一緒になれぬものと即断し、苦悩する。彼はこの苦悩を癒してくれ、彼等と同じ人間になれると思ひ、傍らに置いてあった薬を飲むのである。なぜならば、その薬壘には “When your soul is darkened...drink of me, and be cured.”<sup>31</sup> と記されてあったからである。しかし、これを飲んだ彼は意識ははっきりしているが、次第に目や腕が、遂には身体全体が強ばり、動かなくなってしまうところで、この小説は終幕を告げている。

## V. 結 語

第二作は作者が序文でその意図を明確に述べているように、現状に対する不満から、かくあるべき理想社会を追求した作品であるが、明らかに処女作を継承し発展させたと思われる場面と、全く新たな問題点を織り込んでいる場面とが混淆されていることに気付くのである。*Green Mansions* との関連から言えば、処女作で既に原型が形成され、第二作を経由して発展・展開されてこれに到達する場合と、第二作において始めて新たな原型が形成され、それが継承されている場合が発見される。第二作は Roberts の指摘する通り、実験的色彩が濃厚な作品となっているが、<sup>32</sup> その大きな特徴は性本能を過大視する当時の傾向に対し、むしろこれを超越した性欲のない社会を描いたところにある。処女作にはこの性欲問題が提起されていないことから、Rima と Abel の恋愛を想起する時、彼等の愛の原型は第二作で始めて形成されたことがわかる。Rima が Abel の地上的な愛を理解できずに拒否しようとする例の姿勢は、第二作の Yoletta の愛の様式を踏襲したものと考えれば、彼女のあの消極的なもどかしい態度も容易に理解されてくる。作者は恐らく Yoletta 同様 Rima に対しても、性欲の猛威が消耗してしまった後の、愛の理想的なあり方を示唆したものと思われる。

Hudson の小説には愛し合う者が悲劇的な結末を迎える場面がしばしば見受けられる。処女作の *Transita* は Margarita を生んだ後、夫に捨てられ、やがて死ぬ。Yoletta の愛を得た Smith も自分の過失から毒薬を仰ぐ結果となり、また Abel と結婚する運びとなっていた Rima もインディアンの焚刑に遇い劇的な最期を遂げる。この悲劇性に加えて、第二作では作者が Yoletta 家の滅亡を密かに予測している節がある。それは家族にはただ一つの愛しか与えられず、結婚して子孫を殖す権利を持つ父は既に老齢となり、母も石女となっている状態にあるからである。作者のこの予測は Smith の次の科白 “their lives

appeared now to be drawing to an end”<sup>33</sup> という表現の中にも見て取れるであろう。無可有の郷に住み、いかに長寿に恵まれた人々とはいえ、人間である以上、彼等とて何れは死すべき運命にある。これを心配した病床の母が、父の後継者として Smith に期待を寄せていたのではなかったか。彼女が彼の性格が変わって彼等の持つ高い水準まで高められることを願い、家族の秘密を理解するよう望んだのは、これを裏付けているのではなかろうか。Smith を失った彼等はいかなる民族に属する人々であるかは記されていないけれども、早晩その滅亡が予想されるのである。

同じく民族の滅亡を描いた作品が *Green Mansions* であり、この点両書は共通している。この中で Rima はアンディス地方のある民族の末裔として描かれているが、インディアンのため一命を落し、これを最後に彼女の一族は終焉を告げる。この悲劇性と滅亡は処女作においてその萌芽が発生しているように思える。例えば、あの天使のような美少女 Margarita について言えば、彼女の祖先はスペイン貴族で、大資産家であった。祖父は Basilio de la Barcas と言って、純真で慎しみ深く、その上美貌の誉れ高い貴公子だった人で、社交界の花形であった。だが、この祖父の代になると、打ち続く戦争で破産状態になり、彼は結婚後妻と海辺でひっそり余生を送っている。ここに長年続いた一貴族の事実上の崩壊が見られるのであり、その後は一人娘の Transita の不幸な結婚生活とその死、そして最後は一人残された Margarita が百姓家に預けられることになる。これに似た例は処女作では Peralta 家の娘 Demetria の悲劇にも見られるであろう。しかしながら処女作の二例においてはそれぞれの境遇が惹き起す悲劇は一家の滅亡まで至らず、二人の女性とも作中では存命中である。これが第二作では一族の滅亡が早晩予測され、*Green Mansions* に至ると唯一の生存者たる Rima の死で一族は終焉を告げることになるのである。

大都市を中心に発達を遂げた当時の物質文明を批判し、自然と共に生き、そこに生存意義を見出す作者の態度は三作に共通するのであるが、それは他の作品についても言えることである。この批判態度は処女作において既に明確に表現されており、自然を征服し、これを奴隷化することに真の幸福がないことを、“Ah yes, we are all vainly seeking after happiness in the wrong way.”<sup>34</sup> と述べ、Bacon 以来の幸福追求法を批判している。この批判精神は第二作では、実験的色彩の濃い作品ではあるが、彼の理想とする人間存在の追求となって具現化され、そこに住む人々は清らかな澄んだ性格の持主ばかりであり、自然と共榮し、永遠の幸福に恵まれているのである。ただし理想郷といえども、そこには悲劇性や死、あるいは掟に従わない者には刑罰があって、必ずしも人間に都合の良いものばかり存在するのでないことは前述の通りである。*Green Mansions* に至ると作者の理想は

Rima に集約されているように思える。彼女の外見的特徴や性格上の特徴は既に処女作にその萌芽が散見され、それは Yoletta に継承されて発展し、最終的に Rima へ到達していること、あるいは Yoletta に新たに始まる山頂での愛の場面やその様式、または超人的動作等も発展して Rima に集約されていることも前述の通りである。Yoletta において注目すべきは対自然との一体感であり、また自然の目に見えぬ霊と交流する能力がある点で、処女作には窺うことができなかった精神機能を与えられているところにある。それのみならず、その能力によって精神化された自然は芸術に表現されるというもので、彼等の自然観及び芸術観を通じて、作者の自然と芸術に対する態度が明確になっている。このような精神機能と芸術観によって創造されたのは例の “forest nymph” とか “my woodland fairy” と呼ばれる Rima であった。彼女は人間化された自然とも言うべき、自然のあらゆる美点を兼備した女性であったからである。Yoletta はこの理想像到達への中継的な存在で、成長・発展期の役割を果たすと同時に、愛の様式に見られる如く処女作にはなかった新たな原型を内蔵する女性であったと言える。ここに彼女の独白性が存在するのであり、また処女作の女性が一足飛びに Rima を成立せしめたものでない証左にもなるのである。

### Notes

- 1 佐藤幸正「Rima の生成と発展」『弘前学院大学英文学』第4号、1980年3月、pp.17-30.
- 2 W. H. Hudson, *A Crystal Age* in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London : J. M. Dent & Sons Ltd., 1922), p.12.
- 3 W. H. Hudson, *The Purple Land* in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London : J. M. Dent & Sons Ltd., 1922), p.71.
- 4 *Ibid.*, p.172.
- 5 Hudson, *A Crystal Age*, p.12.
- 6 *Ibid.*, p.56.
- 7 Hudson, *The Purple Land*, p.173.
- 8 Hudson, *A Crystal Age*, p.46.
- 9 *Ibid.*, pp.73-74.
- 10 H. E. Bates, *The Blossoming World: An Autobiography* (London : Michael Joseph, 1971), p.99.
- 11 H. E. Bates, *The Triple Echo* (London : Michael Joseph, 1972), p.8.
- 12 Hudson, *The Purple Land*, p.73.
- 13 Hudson, “Preface,” to *A Crystal Age*, p. v.
- 14 Edward Garnett, ed., *153 Letters from W. H. Hudson* (London : Nonesuch Press, 1923), pp.113-14.
- 15 *Ibid.*, p.116.
- 16 Robert Hamilton, *W. H. Hudson: The Vision of Earth* (London : J. M. Dent & Sons Ltd., 1946), p.17.

- 17 *Loc. cit.*
- 18 Garnett, *op. cit.*, p. 154.
- 19 Hudson, *The Purple Land*, p. 172.
- 20 Hudson, *Green Mansions: A Romance of the Tropical Forest* (London : J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), p. 172.
- 21 Hudson, *A Crystal Age*, p. 121.
- 22 *Ibid.*, p. 123.
- 23 *Ibid.*, pp. 119-20.
- 24 *Ibid.*, p. 124.
- 25 *Ibid.*, p. 111.
- 26 Morley Roberts, *W. H. Hudson : A Portrait* (London : Eveleigh Nash & Grayson 1924), p. 133.
- 27 Hudson, *A Crystal Age*, p. 163.
- 28 *Ibid.*, 143.
- 29 W. H. Hudson, *Far Away and Long Ago* in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London : J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), p. 238.
- 30 Hudson, *A Crystal Age*, p. 201.
- 31 *Ibid.*, p. 238.
- 32 Roberts, *op. cit.*, p. 104.
- 33 Hudson, *A Crystal Age*, p. 236.
- 34 Hudson, *The Purple Land*, p. 261.

(1980.10.25 受付)